

『一人の笑顔のために』

中学生の「税についての作文」表彰式

本校が『国税庁長官 感謝状』を受賞しました！

毎年、「税を考える週間」は全国的に11月11日から一週間とされており、平成5年から中学生の税の作文が募集されてきました。今回は、本校のこれまでの取組が認められ、11月15日の表彰式において受賞の運びとなりました。本当に名誉な事だと感謝しています。

表彰式の最後に、玉名税務署長から次のような話がありました。「どの作品も自身の身近で起こった体験や家族との日常会話に基づいた出来事であり、消費税率の変更、少子高齢化による社会保障費の負担、コロナ禍での支援事業、豪雨災害の復興支援など、マスメディアからの情報を基に、様々な事柄について税との関わりを見だし、税の意義、役割、使われ方などについて自分なりの考えや思いを感性豊かに、かつ、率直に表現されていました。」

本校でも3人の生徒が受賞しました。3人とも、身近な出来事から税金の恩恵に気づき、将来の生き方を見つめ直しています。将来を担う中学生が、「税」について関心を持ち、正しい理解を深めることはとても有意義なことだとあらためて感じた表彰式でした。

<学校表彰（本校受賞）>

☆租税教育推進功績者等表彰 国税庁長官感謝状

☆全国納税貯蓄組合連合会 作文募集推進校感謝状



<生徒作文表彰>

- 熊本県知事賞 鍋島彩里（2年）「私たちの生活、命を守る税金」
- 和町長賞 中原遼大（2年）「税の大切さ」
- 公益社団法人玉名法人会会長賞 平 美鈴（3年）「身近な存在」

※裏面に、熊本県知事賞に輝いた鍋島彩里さんの作文を紹介します。

『私たちの生活、命を守る税金』

平成25年、8月、あんなにも恐ろしいことが起きるなんて誰一人思っていなかった。その日の前日、姉が発熱し、両親が明日は病院に行った方が良さそうだと話していた。そして当日、大牟田のかかりつけの病院に母と姉、私、三人で行き、家に帰ってきたところだった。当たり前のように母が寝ている姉に「着いたよ。起きて。」と言った。しかし、姉からはなんの反応もなかった。ゆずっても起きない。名前を呼んでも起きない。車の中の空気が一瞬でピリピリとした空気に変わった。姉の意識が無くなっていたのだ。このとき、私は初めてあんなにもあせっている母を目の当たりにした。そして、何をされても決して目を開かない姉を。

あせりながらも母は救急車を呼んだ。私の何倍不安だったことだろう。病院についてどんなことがあったのか分からないが、姉は意識を取り戻した。両親の不安と安心は、計り知れないほどのものだったことだろう。姉は何週間か入院し、無事に元気な姿になって退院することができた。

当時小学1年生だった私は、こんなに深く考えたことはなかったが、姉の命を救ってくれたものの中に「税金」もあるのではないかと思った。もちろん、医師や看護師の方々のおかげでもある。しかし、税金がなかったら、いち早く救急車を呼ぶことはできたろうか。救急車を一回呼ぶのにかかる四万五千円は、決して安い額ではない。そう考えると、税金はこれまでどれほどの人々の命、生活を救ってきたことだろうか、とても素晴らしいものなのだと心から思えた。姉は今、看護師を目指している。あの日自分の命を救ってくれた方々のようになりたいと思ったのだろうか。

私たちの生活は税金であられている。その恩は決して忘れてはならない。私達はまだ税金を支払うことはできないが、税金によって支払われている物を大切にすることはできる。まだまだ知らない税について、正しい知識を身につけ、払える立場になったときは、誇りを持って支払っていきたい。なぜなら税金はたくさんの人々の生活、そして命までも守る素晴らしいものなのだから。

